

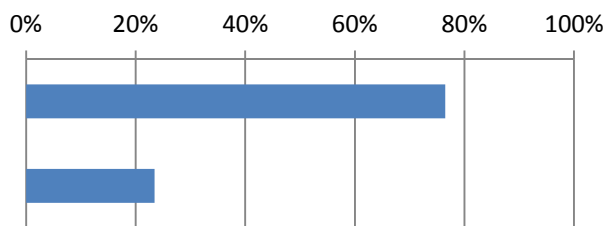
経営学分野における授業での情報活用能力育成の取り組みについて

1. 回答率 14%

| | |
|-------|--------|
| 依頼教員数 | 839(名) |
| 回答教員数 | 115 |

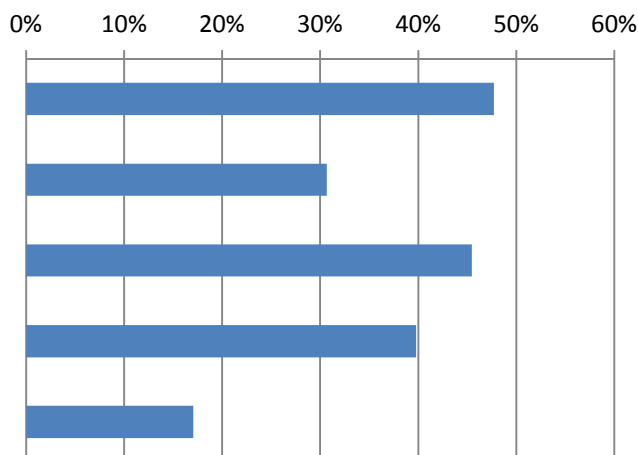
2. 情報教育育成への取組みの割合

| 項目 | 人数 | 割合 |
|-----------|----|-----|
| 実施している教員 | 88 | 77% |
| 実施していない教員 | 27 | 23% |



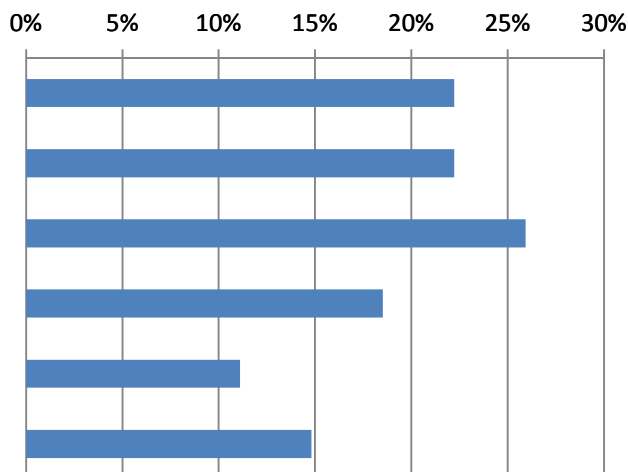
3. 情報活用能力育成への取り組み状況

| 項目 | 人数 | 割合 |
|-------------------------------------|----|-----|
| 情報検索やソフトウェアの活用など基本的な情報処理ができる | 42 | 48% |
| 組織における情報システムの役割を理解している | 27 | 31% |
| 経営情報の社会的影響力を理解し、情報を適正・適切に取り扱うことができる | 40 | 45% |
| ソフトウェアを用いたデータの整理・分析や意思決定への活用ができる | 35 | 40% |
| 経営情報システムによる複数の成功、失敗事例を利用できる | 15 | 17% |



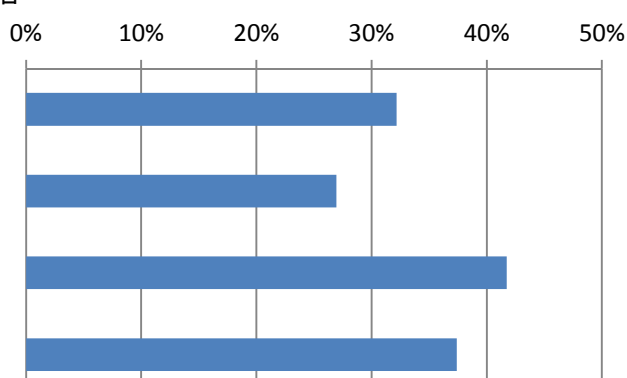
4. 情報活用能力育成を実施していない理由

| 項目 | 人数 | 割合 |
|--|----|-----|
| 初年次・キャリア教育で実施 | 6 | 22% |
| 授業を進める上で情報活用能力を意識する必要がない | 6 | 22% |
| 授業で教える時間がない | 7 | 26% |
| 学習の支援体制が不足 | 5 | 19% |
| 情報活用能力を指導する力が不足 | 3 | 11% |
| その他（他科目で実施、情報教育系の科目ではない、双方向型の個別対応が難しい） | 4 | 15% |

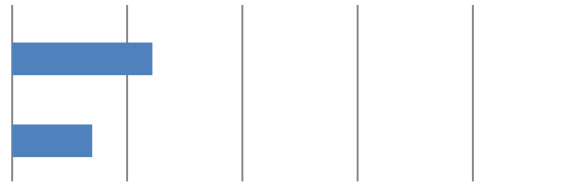


5. 今後取り組まなければならないと考えている教育内容

| 項目 | 人数 | 割合 |
|-------------------------------------|----|-----|
| 情報検索やソフトウェアの活用など基本的な情報処理ができる | 37 | 32% |
| 組織における情報システムの役割を理解している | 31 | 27% |
| 経営情報の社会的影響力を理解し、情報を適正・適切に取り扱うことができる | 48 | 42% |
| ソフトウェアを用いたデータの整理・分析や意思決定への活用ができる | 43 | 37% |



| | | |
|--|----|-----|
| 経営情報システムによる複数の成功、失敗事例を利用できる | 14 | 12% |
| その他(論文を書く習慣、自己表現力と相互理解、仮説検証方法の精緻化、情報を適切に分析、統計解析と仮説検定の方法、環境パフォーマンス向上、社会経済問題を数理的に取り扱う) | 8 | 7% |



6. 教育内容の例(教員個人の対応状況)

| |
|--|
| <p>会社がどのような人的資源施策を行っているか調べさせて、レポートとして提出させている。その際、必要な知識を習得させ、ネット上のデータや情報は必ずしも正しくないことを教えている。</p> |
| <p>経営情報としての簿記会計の基本知識の習得と実践をめざして、表計算ソフトを使いこなして会計情報の作成をする。経営戦略の構築と将来予測のための統計的手法の活用及び事後分析(フィードバック)。ゲームエンジン(模擬経営のための経営シミュレータ)</p> |
| <p>新聞記事などさまざまな情報を見るときに、学生と一緒にオリジナルの情報源に直接当たることを心がけている。高齢化であれば人口問題研究所、ワークライフバランスであれば労働政策研究研修機構、貧困問題であれば世界銀行のWDIなど。</p> |
| <p>「おかしなデータ処理してしまった処理データ」が「生データ」とまったく異なる意味をもつことがあるということを、Anscombeのデータに対してExcelの散布図に備わっている近似曲線を求めるオプションを用いて体験してもらっている。生データではまったく異なるデータでありながら近似直線の式と相関係数がほぼ一致することに、ほとんどの受講生が驚くとともに演習の意味を深く理解する。</p> |
| <p>情報共有の倫理を説明した上でGoogle Docsのファイル共有機能を使って、教師だけでなく全員が相互に見ることができるようにしている。課題提出を教員が用意した雛形に学生が埋める、逆に学生が教員にアクセス許可を出して教員がファイル内容を収集し、あるテーマについての文集(テキストで130ページ程度)を作成した。</p> |
| <p>マーケティング分野を中心とした統計分析、モデル分析に関する授業。セメスター制度を導入しているので、片方で講義、片方でコンピュータ演習を行っている。教材はすべて自作で授業支援システムを用いて演習用データとともにファイルで提供している。Excelベースでの演習のため身近に感じられて、あまり凝った分析ができないが学部のモデル分析入門としては十分。</p> |
| <p>YBGビジネスゲームを用いて、市場競争の疑似体験をさせ、その結果をPowerPointで発表させる。</p> |
| <p>企業における経営情報システムの実事例や、情報システム開発要員の育成・配置等の実務ベースの具体例を、プラス・マイナス両面から紹介すると、学生は興味深く聞いている。</p> |
| <p>組織におけるデータベース管理システムの役割を理解できるように、Officeアプリの利用にとどまらず、サーバ系のオープンソフトウェアの利用も取り扱っている。1年次対象科目「情報活用リテラシ」(学科必修)では、MicrosoftのVBAプログラミングを中心に実習している。</p> |
| <p>市販のパッケージ(シミュレーションゲーム)を用いて、投資、店舗網の構築、かつ収益の改善など、正しく、迅速な飲食店における経営意思決定力の習得をさせる。</p> |
| <p>財務諸表は金融庁のホームページで開示されていて、これらのダウンロード方法から始まり、分析に有用な、XBRL(extensible Business Reporting Language=会計情報のためのタグ付言語)のデータ取り込み方法を授業で取り入れている。会計情報の分析、情報伝達には必須の技術で、社会人MBAでは将来の管理職を目指す者がほとんどであるため、アルゴリズムより利用に力を入れている。XBRLを自由に利用できれば、海外の情報との比較も容易である。</p> |
| <p>経営学は必修科目ですが、初回から最終回まで、パソコンを活用して、企業の行動を分析させている。分析対象企業は、上場企業から学生が選択し、各自が興味ある会社を対象に、財務諸表の数値を使って、企業行動の基本的な枠組みの理解と現実の両方の理解を深めさせようとしている。活用しているデータは、日本投資政策銀行作成のデータベースで、それを教育用に改善して、講義を展開している。分析結果は毎回レポートで提出させ、最終に平均1万文字前後の分量になり、ワードとエクセル活用の基本も身に付けることを狙っている。</p> |
| <p>情報システム開発の企画段階、現状分析、要件の定義の理論を講義する。具体的事例(毎年変更する)を基に、机上でDFD、実体関連図、データの正規化、状態遷移図を作成する。これらを基に後期の情報システム設計論では、マイクロソフトウェア社のデータベース管理ソフトであるアクセスを用いて、事例にあったデータベース(アクセスではテーブルと呼ぶ)を作成し、画面、帳票の作成までコンピュータを用いて実習する。</p> |
| <p>意思決定支援システムにおけるデータ特性、入手方法、利用方法について理解の程度を確かめながら、知識の補足を行っている。実務でのヒアリングに基づいているのでアップデートできていない不安のある部分も紹介している。</p> |
| <p>学生とのコミュニケーション支援、ミニクイズの自動採点による生産性向上</p> |
| <p>学生がプロジェクト型の演習を進める際に同士のコミュニケーションや報告などをFacebookやFreemlなどの民間のサービスの利用を通じて行わせています。企画書や報告書なども電子ファイルで作成し、提出させています。</p> |
| <p>企業組織の戦略をケース・スタディで扱うときに、SNSを利用したマーケティングや経営状況の分析などをどのように情報管理するか、またどのように情報を扱い、経営戦略に応用するのかということを取り入れながら講義を行っている。教材としては、Web上のデータが最も有効であると感じている。</p> |
| <p>Excelを用いた事例。例えば、連立方程式とソルバー、需要予測、回帰分析、ABC分析、Zチャート、ポートフォリオ図、線形計画法、数理計画法とバイナリ整数計画法、経営分析手法</p> |
| <p>受講者が例年180~200名と多いので、授業の中で情報処理能力を身につけさせるという演習的な学習は不可能です。しかし、経営情報システムのメリットや私自身が企業で事業化したシステムなどの成功例を取り上げ、経営情報やデータ処理の活用などを授業で説明しています。</p> |

| |
|---|
| <p>経営情報の事例をあげ、その情報の前提などを説明し、読み取り方を感上げさせています。またエクセルを用いてデータ整理、分析方法を教え、実習しています。</p> |
| <p>情報リテラシーの習得、PDA,スマートホンを用いて情報をリアルタイムに共有して、意見交換を実施しています。講義の教材資料は専用のWebより各自ダウンロード、活用させる方法で省資源に寄与している。最近の講義ではナレッジマネジメントの学習と習得に力点を置いています。</p> |
| <p>講義科目ではパソコン画面を見せて自宅でチェックさせています。中小企業白書が発表された時。協豊会のHPを見て次週に感想を書かせる等々。ゼミではパソコンを各自に使わせてネット検索、データベース(日経テレコン等)を利用しています。</p> |
| <p>1毎週の講義の後に、講義内容の要約、そのキャッチフレーズ、記憶に残ったことをメール送信させている。30%。独自に開発してもらったウェブテストで14回の講義で3回テストして、授業中に結果をフィードバック、30%。A4版6-7ページのケーススタディーで最終試験30%。出席14回で10%。このように、共有ホルダー、メール、ウェブテストと知恵を使っている。効果は、成績を見ると、正規分布に近い。全体の底上げになった。ただし、登録者は、逡減する。</p> |
| <p>毎回の授業で、次回の講義内容について課題用紙を配布し、インターネットで情報検索する事項を指定して、検索させている。インターネット上の情報を、特定の専門用語について検索させることにより、インターネット上の情報の在り処を認識させ、情報検索の確度を高めるように検索能力の向上、情報の系統的な検索方法の能力を向上させるのに有効。</p> |
| <p>簿記、会計を履修した学生に対して、経営分析の基礎的な手法を学習させた後に、実際の上場企業の有価証券報告書をネットから検索し経営分析(財務分析)をグループを編成し行なわせる。これから就職する企業を財務面から評価できる能力を養成する教育的効果を狙っている。受講生が流動性、収益性、安全性、各科目の趨勢分析、諸回転率等から企業の評価(良し悪しの判断)能力を身につけることを目的とする。受講生は企業を財務面から評価する能力の基礎的部分は身につけてたものと考えている。</p> |
| <p>統計的モデル分析を中心として Semester で講義・演習を行っている。学生が使い慣れているExcelによるデータ分析を行っている。文系の学生なのでプログラミングなどには慣れていないため、Excelには含まれないような分析手法については別にExcelアドイン用のプログラムを用意している。分析手法のアルゴリズムを理解するよりも、分析手法の大まかな方法論と結果の解釈に重点を置いている。</p> |
| <p>講義内容をパワーポイントのスライドにして、プレゼン方式で講義を行っている。ビデオ教材も使い、学生に現実的・実践的理解を深めさせるようにしている。</p> |
| <p>適宜日経新聞の記事をベースに現状分析をするが、学生がipodやスマートフォンを活用していることから、彼らにその場で様々なサイトを教え、自分の目で確認させている。大学は入学時に一人一台パソコンを持っているが、特別な講義以外は持参しないので、2-3年前からこうしている。</p> |
| <p>社会で情報システムがどのように役立っているかの事例を紹介している。ネットオークション、ネットショッピング、SNS利用などでの詐欺や個人情報流出事例を紹介し、気を付けるべき点を話している。</p> |
| <p>意思決定を支援するためのデータ整理・分析の実施。顕著な教育効果が出ているとはいいがたいが、経営とは異なる理系の経営系学科で実施すべき重要な事項と考えています。</p> |
| <p>授業では情報教育はしていない。クラスでは個人またはグループによるパワーポイントを使ってのプレゼンテーションが課せられている。そのための調査・分析で各学生が情報ツールを利用している。情報ツールを利用する能力がないと、クラスについていけないような授業システムになっている。</p> |
| <p>課題レポートについては、紙資料による提出を廃し、学内ネットのライブラリに電子データで登録するように統一した。レジュメ等についても、ライブラリにアップしたPDFファイルで提供している。</p> |
| <p>身近な企業の倫理規定、規範等をwebから紹介し比較する。日本経団連の倫理憲章を紹介し解説を行う。企業の社会的責任について新聞のニュースを読み比べ議論を行う。グローバル企業の社会的責任の事例として、解説し同社のweb(英語)上の公開資料をもとに研究する。教育効果として、企業の社会的責任への理解が得られ、自身の日常において関心を持ちながら生活する習慣を持ちたいと意識の醸成が実現したものと思われる。毎授業後のリアクションペーパーに述べられている内容から確認ができた。</p> |
| <p>経営史という科目では、経営情報の社会的影響力や情報の取り扱い方について特に重点的内容とされていないのですが、個別企業や経営者が発揮している社会的影響力がしばしば言及されます。企業から出されている様々な経営情報の信憑性や法に沿った適切な取り扱い方については、必要となるところで学生に注意を促しています。</p> |
| <p>主にオペレーションズリサーチにおいてExcelの活用を中心に行っている。なるべく最新の実際のデータを活用するようにしている</p> |
| <p>授業の中で、課題を与え、Web検索や資料検索等で得たデータを基に、基本的なソフトウェアを用いてレポートを提出させ、理解度を確認している。</p> |
| <p>基礎的な情報リテラシー、すなわち適切な情報源にアクセスすることの重要性、特にインターネット上の情報の取り扱いについて適宜説明している。また、講義内容をより深く理解したい場合の情報収集の方法、特に大学で用意している各種のデータベースについて紹介している。</p> |
| <p>自作のPPT教材を用いて教科書には取り上げられない最新の経営情報システムを紹介している。また企業では実務にタブレット端末を使う例が増えてきているので、毎回行う小テストを全員に配布したiPodで回答させている。これにより企業の現場ではiPodが業務に使われているということを感じさせている</p> |
| <p>Word文書の作成でも長文編集機能が身につけていないので、簡単な手引書を作って指導している。自分の作ったファイルは何度でも使用するつもりになって系統的に保存しておくよう強調している。いまから生涯学習をスタートさせるつもりで取り組むよう指導するが、趣旨はなかなか伝わっていない。それほど教育効果があったとは思えませんが、長文編集に多少は関心を持ってもらえたかなという程度。</p> |
| <p>ゼミでは、企業調査・産業調査の結果をプレゼンテーションするさいのポイントとして、情報をどのように得て、整理し、活用するのか、という点を学んでいきます。その際に、当然、引用などのルールの徹底についても学んでいきます。</p> |

| |
|--|
| 事例を教材として配布し、授業に織り込む程度。なお、情報関連の授業は他の教員で担当している。 |
| 大学の情報センターで、グループごとに分かれて、経営戦略に関わる企業情報を適切に収集・整理・加工・処理・発信できる様指導している。Web検索や資料検索等によって得たデータをもとに、パワーポイントにまとめてプレゼンテーションをさせている。また、学習支援システムを活用している。 |
| 適切なデータの検索と適切な統計分析の取り組み方と手法 |
| Excelによる情報処理入門のテキストを用いて実習的に実施している。経営統計の理解を深め、経営の問題を処理するための基本的技法を身につけさせることができた。さらに、経営統計に対する興味、関心を持たせることができた。 |
| 統計的手法を講義するなかで、必要に応じて、エクセルによる処理を紹介している。 |
| ウェブ上での情報検索結果を用いたレポート作成の課題を課している。 |
| Jリーグがウェブサイト上で公表している財務データや競技データを用いて基礎的な経営分析を行い、分析結果をグラフ化してプレゼンテーションを行わせています。修士課程なので、分析方法は指定せず、自由な発想での分析を期待しています。また、分析に偏らず、わかりやすく視覚化し、その内容を的確に伝えることも重視しています。 |
| セブンイレブンとAMAZON.COMが情報を活用している事例を紹介する。店舗型小売業とネット型小売業における情報の流れやその情報が活用された結果、どう経営に繁栄されているか、理解できるようにする。 |
| この授業は毎年約300名近くの履修者がいる。授業形態はコンピュータ実習室。その理由はなるべくコンピュータを活用する機会を増やすため。たとえば、・情報システムとは何か(分類に応じた事例を調査させる)、・ユーザインターフェースとは何か(ユーザインターフェースの良いサイトを比較調査させる)、・コード設計の目的(自分の出身校のコードを調べさせる)、・ファイル処理の概念とは(Excelの複数のシートからVlookup関数を用いて請求書を作成するなど)、など、概念を理解させるために毎回、コンピュータを活用する授業を展開している。 その理由は、学生への授業への参加に対する動機付けが大きい。座学の授業だけでは学生はなかなか具体的なイメージを持つことができない。コンピュータを利用することで学生は授業内容を理解することが容易になること、道具としてのコンピュータの役割が理解でき、活用を始めることができる。 また、毎回、LMSを用いて小テストを行っている。これは、期末テストを含めた最終評価にも加算するため、学生は授業中に講義内容を理解しようと努める。この小テストの中に学生からの質問事項や興味深かった点も記述させている。次の授業時間の最初に前回の質問事項を取り上げて説明を15分～20分程度をかけて説明する。そのため学生は質問事項を書こうとし、教員は何故分からなかったかを理解できる。大規模クラスに起こりがちな一方通行の授業を双方向授業にすることができる。教員も独りよがりな授業から学生も理解できる授業とすることができる。 コンピュータ実習室での授業形態は学生に情報を活用させることができると、教員の授業への振り返りをもたらすというメリットがある。反面、学生の中にはコンピュータを前にしてユーチューブを見たり、授業に関係ないことを始める者も一部いるが、どの学生が何をしているかが分かる教員用画面があるので、授業中に学生に注意することが可能である。 他の大学で担当している授業では、大規模クラス対応のコンピュータ実習室がないため、全員にipadを持たせ(大学で貸出)、同様な授業を行っている。これも学生から好評である。特に教員が話すコンピュータの専門用語について学生達は自分で調べて理解しようと努めていることは好ましい。 |

7. 大学として必要な課題への意見

- ・ 情報活用能力の到達度のスコア化、情報活用能力育成のための支援システムの充実など
- ・ 情報活用能力の高めるための取り組みを促進するため、初年度やキャリア教育などにより、ソフトウェアの操作に関する基礎的能力をしっかりとつけさせるか、学習支援者を充当することにより、教員の指示がすばやく教室内に浸透するようになる必要がある。
- ・ 一般公開情報の活用を広く呼び掛け、一方で著作権法の説明が必要。論文作成としては、ルールに沿った研究方法の指導は必要
- ・ 制度的にも強化が図られているが、情報活用能力の育成には倫理面での取り組み強化が欠かせない。早期から理解を深める取り組みが必要だと感じている。
- ・ 情報活用のための方法論・スキルに留まらず、「何のための情報活用能力なのか」をしっかりと理解させ、「単に情報処理できる」から「必要に応じて適切な情報処理ができる」を徹底させていくことが必要と考える。
- ・ 情報活用は物事を客観的に分析するための補助的なもので、ネット上にすべての回答が存在するとは思わないように教育する事が大事。学生は、ネットを検索すればすべての解が存在する、と安易に思う傾向がある。
- ・ あらゆる情報の取得や収集が24時間365日可能となった現在、あふれかえる情報の何が重要で必要で、何が重要でないか不要であるかということ各自がどのように選択し、真偽の判断を下すかというスキルを教育する必要性があると感じる。
- ・ シラバス作成を担当者に任せない。カリキュラム内容、アドミッションポリシーの教員全員が共有する。初年度教育の徹底化(情報教育以前の学びへの姿勢など)。学科学部間の垣根を取り払った教育の共通化の探求。
- ・ メンバー同士の質疑応答、他の研究会の発表、質疑応答に積極的に参加し、これらによるフィードバック効果
- ・ デジタルオンリーの情報活用能力も大事だが、まとな読書をしていない学生が多いので、誤字・脱字・文章作成の間違ひが多い。また、人前で意見交換をした経験がないため、しゃべれない。ディスカッションまたディベートなどを取り入れて、積極性を持たせるようにしたい。
- ・ 教員自身の情報活用能力の向上を図るために、教員自身の個人的学習だけに依存せず、大学として教員の研修体制を充実させる。
- ・ 情報活用能力育成については、その分野の専門教員によってなされています。その他に1年次の基礎ゼミの時間には、基礎的な情報活用教育の時間をとっています。また、経営情報の担当教員もおりますので、経営学と情報教育をつなぐような教育もされているかと思います。しかし、学生たちの状況からすると、学習管理支援システムの実践的活用促進や情報活用能力育成のための取り組みがさらに必要と考えられます。さらに、私自身についていえば、教育力向上のための情報活用能力促進の研修が必要であると考えています。

- ・ 情報倫理教育. 特にブログやSNSなどの利用における個人情報保護や誹謗中傷の防止. ネットオークション詐欺やフィッシング詐欺の予防など.
- ・ 初年次・キャリア教育と専門教育の連携.
- ・ 教員研修ならびにTA(ティーチングアシスタント)の養成
- ・ 教員への研修制度と、学内の情報システムの利用環境の充実。
- ・ 大学全体で、どのように学生に対して情報活用能力を身につけさせるのかについてのグランドデザインが描けておらず、結果、個々の教員や科目レベルでの取り組みに終わってしまっているのではないかと考えている。4年間を通じての情報教育の道程を学内で共有することがまずは必要ではないか。
- ・ 個々の科目での情報活用能力育成のための教育の必要性についての整理と教員間の共有
- ・ 根本的な課題として、教員が情報活用教育を率先して指導しやすい環境づくりが必要。パソコン及びその周辺機器、様々なソフトウェアなども含め、購入行為に管理が厳しいので、使いこなしてみようというモチベーション意識が低くなるのではないかと考えられます。大学に情報処理活用教育を強く提起し、組織を動かすような、組織を引っ張ってくれるような教員がいないのではないのでしょうか。(情報活用領域には若い世代の先生が多いのかもしれない。)
- ・ 営業、総務、経理など具体的な業務をシミュレーションするなど、リアリティのある数値データを使った情報活用能力を身に付けさせたいと考える。
- ・ 産業界での変化の激しい分野、たとえば資本提携、技術提携、R&Dへの投資などで、大きな変更があった企業でのフィールド調査を大学のPTで行い、学内教員がその資料にアプローチできるようにすることが必要だと思います。(個人では困難)学生へのフィードバックは「実践課題」のなかで上記の「調査資源」を使わせるような教育支援システムを工夫する必要があります。(座学では困難)上記2課題は学部内で芽生え始めて2年が経過しますが今後、拡充する方向です。
- ・ 組織としてはないけど、情報ではなく、教育への努力を正当に評価してほしい。
- ・ 情報機器(スマートフォンやPC)やアプリケーション、ソフトなどの所有状況が参加学生によって差があるので、それを埋める必要がある。社会においても据え置き型からモバイル型の機器へと活用の比重が移っているので、いわゆる「パソコン教室」的な設備だけでは、効果的な大学教育が展開できなくなっている。
- ・ 学内でどこでもネットが使えるように無線LAN環境の整備が必要です。現在は学生ロビー等学生の集まる場所のみ無線LANが使えます。
- ・ 大学として学習支援管理システムの構築すること。携帯端末(タブレット、アイフォーン、スマートフォン)を用いた情報活用能力の育成、教員に対する研修体制の充実
- ・ 各専門分野に適した情報リテラシー教育の充実
- ・ 情報活用能力以前の問題で、そもそも組織とは何か、意思決定とは何かといったことに関して、概念や理論を覚えなくては行けない。情報活用能力というのであれば、そもそも情報とは何か、人間の認知的活動の構造はどうなっているのかということを理解することがまず重要であり、ICTに対する理解はそのあとにくるべきである。
- ・ 経営において情報が重要で、必要だということは授業で説明していますが、情報活用能力となれば、具体的にどのような情報が重要で、それをどのように活用しなければ、企業が衰退していくのだ、ストーリー性を持ったシナリオが必要になってくると考えます。現時点でそのようなシナリオ、ストーリーのある適切な教材が存在しない(?)ため活用できていません。自分で作る必要性は感じていますが、まだ作ることができていないのが現状です。
- ・ 教員が情報ツールを有効に活用できるように、バックアップ体制を整備すること、講義内でのTAの活用をより柔軟にできるようにすること。
- ・ 文系の学士力の向上のため情報加工技術の改善、教員のFD活動の積極的な取り組みが不可欠と考えます。理工系の先生を特別講師として招へいして、科学的な知識や実験を通じての体験授業を実施しています。
- ・ Webテストの普及、および試験結果のふいーどばっく。是等2つ、特にフィードバックの欠如は、大学基準協会は採用すべき。
- ・ 学生が時間帯を自由に使える情報機器の提供が、情報インフラとして必要だが、数千人の需要を賄えるだけのツールの提供ができていない。情報インフラとしての検索速度が遅く、サーバーの増設、CPUの能力の抜本的な向上が必要である。NHKなど、メディアの情報アーカイブスの適切な活用により、的確で質の高い情報へのアクセスを可能にしたいが、大学運営者の認識が弱く、積極的な支援が得られる組織作りができていない。教員および学生などが自主的に学内に情報アーカイブスを構築したいが、事務局が協力的でない。
- ・ まずは、情報処理能力を学習し、その後、それを用いた具体的な社会現象分析を演習で実施すること。生きた情報処理の学習が基本的に重要です。
- ・ 現実の問題に対して適切にアプローチをすること。そのためには、現実に近いデータが必要。
- ・ 教員の教育力向上のための研修体制の充実、学習管理支援システムの構築等。
- ・ 何と言っても自分のベースとなる社会観や人生観が、まだまだ十分ではない学生がお多いので、セキュリティー関係については適宜事例紹介はしているが、それ以上に自分に与えられている義務や権利意識を認識するように注力している。情報は常識のないものが使うものではないというのが基本と教えられているから。
- ・ 学生の情報活用能力を向上させるには、教員側のスキル向が欠かせない。インフラを整備しても教員が利用しない場合が多く、学生への使用が徹底できていない。研修だけでなく、高齢教員への対応も課題となる。
- ・ 多くの大学で情報リテラシー教育が導入されているが、授業を含めた日常では、携帯情報ツール(スマートフォン含む)が多用され、PC活用場面がどんどん減少している。習得したスキルを日常でフル活用する場面を、教育の中で設定しておかないと実効性が上がらない。更に日常生活で、世界の動き、国内の動きなど身近なテーマに常に接しながら、情報活用を進め調べる、考察を深める、纏める等のプロセスを理解させることが、より能力を高めることに繋がるであろう。ゼミにおいては、週の動き、主要ニュースから一つ選び、情報活用能力を発揮し、ゼミで発表を行い、その後ゼミ性全員から意見を述べさせることも実施中である。社会人基礎力向上を目指した教育である。
- ・ 学生の情報活用能力の充実を図るのであれば、大学として最も力を入れるべき課題は情報教育の担当教員や学習支援者の確保だと思います。ハードの環境は充分整備されてきていますと思います。今後大学教員の情報教育力の向上や学習支援者の養成と雇用の方に重点を置き、能力や人材などソフト面の充実と整備に力を入れるべきだと思います。

- ・ 実習スペース、機材の設置スペース
- ・ 経営系を志向する学生の数学力の著しい低下に対してどう取り組むか。情報活用能力以前の問題を抱えている。大学だけで解決できる問題なのかも検討の余地があると思う。
- ・ 大学として、情報活用能力の位置づけを明確化、教員間の連携、情報環境を整備、支援体制を強化する必要がある。
- ・ 新聞・雑誌の記事や学術論文のデータベースの利用方法と、そのなかから適切な情報を取り出すための基礎的訓練を繰り返し行うことが必要である。具体的には、日経テレコンやCiNiiといったデータベースを利用して情報を入手させ、それが適切でない場合には適切な方法を教えて再度情報を探らせるといった、外国語などと同様な「実技科目」としての情報活用のための講義(正規科目としておくかどうかはともかく)が必要である。現状では、情報リテラシー系科目は大講義形式であり、基本的には使い方を教えて終わり、である。逆に基礎演習やゼミといった小集団演習の場ではそればかりやっているわけにもいかない。繰り返すが、外国語科目と同様の小集団による実技演習科目の設定が必要と考える。
- ・ 考えながらWord文書などを書く機会をどんどん提供することにすれば、練習のための練習をする必要はないような気がする。ただ、自分でPCを買っていない学生がいるのには困る。他人の文章や主張を自分の主張の中に取り込む過程をどのように指導したらいいのかがよく分からない。他人の主張が分かるとはどういうことかをどうやって納得させられるかが分かりにくい。学生はいろんなバージョンのOSを使っている。中には外国語バージョンも使っている。そこには海賊版も含まれる。微妙に機能が違うので指導しにくい。
- ・ 情報活用能力のレベル、例えば社会で即実践できるものを目標にするか、学習に役立つものにするか、情報関連の先端的なものを学びかて大きく意見が分かれる。前者であれば、本大学でも実施している。
- ・ 教員教育力育成向上のために海外の先端事例(ジャーナリズムに影響されていない)を、本質的な要点とともに次の教育の展開の研修を教員に開始する実施計画を開始(秋学期から開始)した。さらに学士力についてOECDや米国教育評価、英国の達成基準を参照により合理的な基準の作成の検討を始めている。学内で承認を得るにはまだ遠いが、ICTの次世代型活用を推進し、より教育内容の合理性を推進していく。ゆえに大学教育の課題は、教員の教育への理解と知識、実践力(教育力)の育成、教育方法の積極的な研究と展開(先端ICT活用)、受講学生の形成評価・達成評価の可視化、理解促進へのフォローを達成・到達できることを課題と認識している。
- ・ 目的に沿った科目間の調整
- ・ ソフトウェアの充実、TAの充実、情報関連科目の履修希望者全員の履修の実現、学生の情報処理関連の資格取得に対するよりいっそうのサポートなどが挙げられる。
- ・ 情報活用能力を学生に身につけさせる必要は高い。そのためにはPCの習熟が先決である。特にMS OfficeのExcelの習熟が有用と考える。経営学はそれを取り上げる科目ではない。PCを扱う科目が充実されると聞いている。
- ・ ITリテラシー能力を学生に身につけさせること
- ・ 自然現象は多くは正規分布に従うが、ビジネスのような社会現象は必ずしも正規分布に従うわけではない(経験則であって誰も証明していませんが、80対20の法則など)、ということを理解させることが情報活用能力の第一歩であると思います。そのうえで、Excelでもよいので、初歩的なデータ分析を身につけさせ、大まかなトレンドなどを迅速に捕まえる能力を鍛えることが必要になると思います。そのあとは、個々のプログラムやカリキュラムによって目指すところが異なるので、何とも言えません。
- ・ コンピュータ実習環境の整備と利用ソフトウェア導入の理解があれば良いと考える。というのも、一斉に何々をせよ、と言われることを大学教員は嫌うと感じるからである。現在、筆者が所属する大学でも、e-ラーニングシステムを利用せよとの活動がある。しかし便利な道具であれば、教員は利用する。また多くの教員が利用するようになれば、もしかすると便利と思うかも知れないからである。また同時に大学では活用事例の紹介や研修体制を強化しているが、教員の反応はそう高くない。その理由はまだ情報活用は特別なコンピュータオタクの教員がやっていると考えられているからとを感じる。逆に良い教材がたくさんあることが望ましいと考える。
たとえば、プログラミング入門では、自習用教材としてWebラーニングプラザの技術者Web学習システムを利用している。これは、ビデオ教材として1回が10分程度であり、それを学生が見て、自己診断テストに答えるというものである。このような手の込んだビデオ教材を作成するのは教員個人では大変である。しかしこのように無料で公開されている素晴らしい教材を利用できることは教員には大変助かる。学生はビデオ教材が好きである。最近の学生は文字を読まなくなった、読解力がないとこぼすより、理解が容易になるのであれば、利用すれば良いと考える。
特に現在欲しい教材は情報倫理教材である。2002年度より情報倫理教材コンテンツを購入し、毎年1年生全員に必須として教材を読ませ、修了テストを行わせている。導入以後は倫理問題として大きな問題は発生していないが、まだまだ、詐欺にあったりする学生も居る。実体験して初めて怖さが分かるということもある。これを仮体験できるようなシミュレーションを持つ教材があれば良いと感じる。